

# 公立学校における地域とのつながりに関する学校教育論的基礎研究

Basic Research of School Education on the collaboration between Public school and community

矢野 博之<sup>1</sup>, 石井 雅幸<sup>1</sup>, 柴崎 正行<sup>1</sup>, 杉本 真紀子<sup>2</sup>, ビンヤカルマ リラ<sup>3</sup>

<sup>1</sup>家政学部児童学科, <sup>2</sup>千代田区教育委員会, <sup>3</sup>カトマンドゥ大学

キーワード：学校経営, 特色ある学校, 学社連携, 地域支援, 大学の役割

## 1. 研究の目的

大学, とりわけ, 教職課程を持ち, 学校教員を輩出する機能を持った大学が, 地域の公立学校に対していかなる貢献(連携や支援)が可能となるのだろうか. 本学に目を向ければ, 教員養成を主たる目的とする学科である児童学科は, 千代田区を主に, 地域の公立学校(小学校・幼稚園)とのつながりの中で地域支援や還元, 学生への教育を融合させながら, いくつかの試みを行ってきた. また, それらの取り組みをベースにして, 本学の地域に果たす役割をより一層意義深いものにするべく検討することが求められている.

本研究では, 「地域の中での学校」という概念を重要視し, 児童・園児にとっての地域社会の役割や意味を具体的に問う. そしてそれに対し, 学術研究ならびに高等教育機関である本学が果たせる役割や有り様を考えていく. 研究の方法と進行としては, 大学と地域の公立学校について, 国内外の事例を併せて検討する. なかでも, 学校改革と学校教育の改善を密に必要としている開発国・ネパールでの事例をともに共同検討しながら, 本学ならではの連携の具体を探る.

## 2. 活動実施報告

活動は大きく2つに分けられる. 一つ目に, 国内の事例としての, 千代田区内の公立学校に対しては, これまでの児童学科での協力・連携体制と実績の積み重ねがある(千代田区立九段小学校ならびに九段幼稚園, 同区立富士見小学校への直接的参与や区内8小学校への支援員派遣等). そのふりかえりと整理からの特質と課題の析出作業である. 二つめに国外の事例としての, ネパールの公立学校(Governmental School)に対する支援と連携の方法論の模索である. こちらについては, 限られた条件の中で探索的に進めていくために, アクション・リサーチを採った.

### (1)国内：千代田区内の学校・園

同区内における研究活動としては, 元来学科レベルにおけるこれまでの支援・連携活動の継続をベースとしている. そこで, 2011年度の活動については, 本プロジェクト関連の新機軸となる活動としてではなく, これまでの実績の整理と分析を主とした.

本研究に照らしての視点の析出としては, ①連携の起点としての提案と依頼, ②連携のチャンネルおよびシステムとしての連絡および合意体制, ③それらを実現に向け可能とする条件, を挙げることにした.

### (2)国外：ネパール国内での学校・園

主に, 本研究の協力者の主たるフィールドである, Dhading 地区 Kalleri 村(同国中西部山岳地帯, 人口約 20,000)での2つの小学校(1校は幼稚園併設)での調査を行った. Shree Kalleri Secondary school, ならびに, Shree Dhading Lower Secondary Madhyamic Bidhyala School の2校である. 両校へは 2011年12月の現地調査および, 2012年3月同国でのスタッフとのミーティングを行った. またそれに先立ち, 研究協力者の招聘来日(2012年2月)時に, ミーティングも重ねている.

なお, 本プロジェクトの計画進行上, 東日本大震災に絡んでの諸事情(在外協力員の訪日の延期等)により, 上記(1)(2)のうち, (2)のネパール調査と活動の実施を優先することとして, その実施や打合せを計画上可能な時期に移したり実働を重点化するなどの調整をおこなった. また, (1)の千代田区調査については, 日常的な活動の延長線上に置くことが可能であることから, 課題の整理を主とし, (2)に向けての参照として位置づけながら進めた.

### 3. 研究目標の達成状況

継続してきた千代田区内の学校・園との連携・支援事業についてのふりかえりから析出した視点から、①提案と依頼のありようと③条件、②連絡と合意のシステムと③条件、を枠組みとして進めた結果、以下の活動実績と知見の獲得が得られた。

#### (1) Shree Kalleri Secondary School の事例

同校は標高 1,700m ほどの寒村にあり、そこに 400 名ほどの児童生徒が通ってくる。ここでは、同校校長や教職員との話し合いから課題を見出すこととし、教材や備品の補填・配備、児童生徒の学習活動の発展的展開を同時にねらう活動を、最小限の支援提供という条件の中で導き出した。

結果、一つ目に、これまで同校には存在しなかった山羊の飼育を新たに学校教育活動に位置づけることを共同立案し始動した。これは、児童生徒にとっては、生物飼育による環境教育と生物学習の教材となり、またそのブリーディングによる増産や搾乳からの学校活動資金の拡充を可能とするねらいがある。また、本学児童学科としては、その飼育観察活動を継続して指導していく役割が求められる。

条件上の特質としては、ブリーディングを主とすることから、自立支援への投機となり、基本的に初期投資のみでコンパクトに収まる点、また、飼育活動であることから、継続しての対話・連絡を具体的に必要とし、いわゆる丸投げの箱物的な支援ではないひとの活動を生み出す支援であることが意味をもつと考えられる。

二つ目に、同じく同校には存在しなかった学校図書への配備を計画することとした。こちらは、まずは実態としての、学習図書や教材資料としての書籍の配備を主とする。施設としての教室や建物ではなく、書籍資料の配備を第一とすることにより、同校のような、学校建築施設的にも不備の多いところにも、各教室への分配や一部空間の再利用という最小限の投資で直接的に教職員・児童生徒の活動への支援が可能となる。また、本学児童学科としては、読書感想文コンテストの企画やネットを介しての意見感想交換など、遠距離にあってもその活動への継続しての支援や関連書活動の展開が可能となるものである。

これらの学校改革活動は、規模も具体物も非常に限られた支援であるのに比べれば大きな成果が期待でき、支援・連携もコンパクトに限定してお

こなうことができる。2011 年度は、課題の焦点化と立案が果たされ始動まで進めた。2012 年以降も継続しておこなわれ、現在進行中である。



写真 1 Shree Kalleri Secondary School での教員調査

#### (2) Shree Dhading Lower Secondary

##### Madhyamic Bidhyala School の事例

同校は同じ地域にはあるが、標高は 1,000m ほどであり、水資源・居住環境的には若干先の学校よりは好条件下にある。とはいえ経済的に生活水準としては寒村にちがいはなく、同様に厳しい学習環境にある。こちらについては、幼稚園（就学前教室）を併置するというちがいがあがあるが、まず先の Kalleri Secondary School を先行事例とし、そこでの達成状況を確認しながら、比較対照しながら、同校での支援・連携活動の立案と実施を合意し、計画進行中である。こうした連携関係を立ち上げた点が今年度の成果である。

### 4. まとめと今後の課題

期せずして、国外での活動を優先しながら実施した結果、二つの学校での学校改革を立案し始動することが大きな成果である。今後これらの活動は同じく継続する。この試みそのものが、本学児童学科においては貴重な研究活動であると同時に、本学学生にとっても貴重な教育資料となる。今後この活動について、さらに展開を試みながら、新たな連携・支援の具体的活動を模索していく。

### 5. 研究成果

2012 年 4 月現在もなお、ネパールの両校に対しては、学校改革支援事業計画の進行途中である。その経過と成果については、追って、SHERNA 等で報告していく予定である。